

世界史

I 次の文章を読んで空欄に最も適切な語句を記入せよ。なお、文中に付記した中国度量衡のメートル法換算値は時代によって異なる。

780年、唐王朝はそれまでの租調庸制に代えて **A** 法を施行した。この税制は物納の税と銭納の税の二本立てで、前者は農地所有者を納税者と定め、その面積に応じて穀物を納付させる土地税、後者はそれまで銭納していた諸税を一括し、課税対象となった戸の資産に応じて銭を納付させる資産税である。この税制はそれまでの税制と比べて画期的な税制であった。では、どのような点で画期的だったのだろうか。税制とそれに密接に関わる土地制度の展開を概観しながら考えてみよう。

周王朝では井田制^{せいでんせい}と呼ばれる土地制度が行われたとされる。これは、戦国時代の思想家で人間の本性に関する **B** 説を唱えた孟子の著作に見えるもので、900畝（約16^{ヘクタール}）の正方形の土地を「井」字型に9等分し、8戸の家が周囲の8区画を私田として耕作して生計に当て、中央の1区画は8戸共同で耕作し、その収穫を税として納めた。この井田制は現実に実施されたかどうか定かではないが、後に儒家の理想とする土地制度とされた。

秦では、戦争で立てた軍功により与えられる爵位に応じて土地や奴隷も支給されるという軍功爵制が、法家の政治家で孝公に仕えた **C** によって導入された。この軍功爵制はやがて20ランクの爵位で構成される二十等爵制に整備され、前漢初期にはこの二十等爵制の爵位に応じて農地が給付されていた。民が所有する農地には、その収穫の1/15（のち1/30）が税（田租）として課せられた。

後漢の終わりに張角が起こした **D** の乱によって社会が混乱する中で頭角を現した曹操は、その経済的基盤を固めるため、社会混乱の中で放棄された耕地を吸収して流民などに耕作させる **E** 制を実施し、畝（約5^{アール}）毎に穀物4升（約0.8^{リットル}）を田租として課した。さらに、後漢王朝が臨時に課していた税を「戸調」として制度化し、絹2匹（約19^{メートル}）・綿2斤（約445^{グラム}）を戸毎に課した。

曹操が実質的に建国した **F** を滅ぼした西晋では、**G** 法と呼ばれる土

地制度が実施された。この G 法には田租の課税対象となる農地を民に給付する規定も含まれていて、成人男子には50畝（約250[㌧]）、成人女子には20畝（約100[㌧]）が給付され、畝毎に穀物4斛（約80[㌧]）が田租として課せられた。また、戸調として戸毎に絹3匹（約29[㌧]）、綿3斤（約670[㌧]）が徴収された。

西晋滅亡後、混乱が続く華北を統一した北魏では、孝文帝の時に均田制と均賦制が実施された。均田制は15才以上の民などに土地を給付する制度で、男子には穀物生産用の露田40畝（約200[㌧]。女子には20畝）、桑など栽培用の桑田20畝（約100[㌧]）、さらに麻の産地では麻田10畝（約50[㌧]。女子には5畝）も給付され、露田と麻田は死亡もしくは70才になったら H させた。均賦制は均田制に対応する税制で、絹1匹（約9.6[㌧]）・穀物2石（約40[㌧]）が夫婦を単位として課せられた。

隋・唐では、露田の名称が I 田に、桑田・麻田のそれが永業田に変わり、永業田の世襲が認められ、給田対象が男子に限られるといった変更はあったものの、北魏の制度が基本的には継承された。税制に関しては、隋では北魏以来の租・調と役（兵役や労役）を課す租調役制が行われていたが、唐では8世紀前半に絹・布による役の代納が一般化し租調庸制となった。また、唐では課税単位が夫婦から個人に変更され、税額は一人あたり租が2石（約120[㌧]）、調が絹2丈（約6.2[㌧]）・綿3両（約112[㌧]）となった。

これまで述べたような税制と土地制度の変遷を見ると、民衆に対して土地を均等に給付し、税を均等に課税するという井田制の理念の実現を目指した結果として均田制が制定されたと見ることもできよう。均田制では、王朝が一定の基準に基づいて土地を民衆に給付してその生活を保障するとともに、給付した土地に見合う租税負担を求めることが建前となっていた。そのため均田制下での租税は均等に課すことが原則となっていた。しかし、現実には民衆の中には大きな貧富の差があり、土地所有についても絶大な格差があった。A 法は、均一の農地所有を前提とした均等な租税負担という従来の課税原則を放棄し、民衆の貧富差に基づいて負担能力に応じた課税を行うという新たな原則を採用した点にその画期性があったのである。現実に対応したこの税制はその後の王朝によっても採用され、明代に J 法が施行されるまで継続された。

Ⅱ 次の文章を読んで空欄に最も適切な語句を記入せよ。

16世紀のヨーロッパでは、ドイツの修道士マルティン＝ルターや、フランスの神学者ジャン＝カルヴァンに代表される宗教改革が起こり、ローマ＝カトリック教会の絶対的な権威が揺らいだ。これに対して、カトリック教会も独自の改革を進めたが、その中で最も影響力を持ったのは、フランシスコ＝ザビエルやスペインの貴族出身の軍人だった **A** らが1534年にパリで結成したイエズス会（ジェズイット教団）であった。

宣教のためには世界中のどこにでも赴くという誓願を立てた彼らは、実践的な知性による宣教を目指した。そのため、志願者には当時のヨーロッパにおける最新の学問と献身的な労働奉仕の精神が厳しく教授された。こうした教育を受けた会員たちは、中南米の他にも、インドや中国、 **B** といったアジアの各地で布教活動を展開していった。アジアにおいては、1510年にポルトガルによって占領されたインド西岸の **C** が同会の布教の拠点となった。

ザビエルは、スリランカやマラッカ、モルッカ諸島での調査の後に **B** でも宣教活動を行ったが、 **B** 人に「キリスト教が唯一の真の教えであるならば、どうして中国人がそれを知らないのか」と問われたことをきっかけに、中国布教を強く目指すようになった。アジア各地の人々には仏教徒が多く仏像・仏画などの **D** を崇拝していたが、アジアの仏教徒に **D** 崇拝をやめさせてキリスト教を信仰させるには、アジアの国々が手本とする中国にキリスト教を広めることが肝心だと考えたのである。しかし、彼は中国大陆への上陸を果たせぬまま病没した。

ザビエルが果たせなかった中国上陸を実現したのはマテオ＝リッチであった。彼は儒教を宗教ではなく哲学とみなし、その儀礼は宗教的な行為ではなく社会的習慣であるとした。その一方で、『天主実義』を著し、中国古典に見られる天上の帝王を指す「上帝」はキリスト教の神（天主）と同一であるとも論じた。こうしたイエズス会による中国の伝統社会への理解と承認の姿勢は、後にカトリック会派の中で **E** 問題を引き起こし批判されることとなる。

時の中国皇帝から北京在住を許されたリッチは、北京で『幾何原本』や『測量法義』などの著作を漢人官僚の協力を得て刊行した。前者は、紀元前3世紀頃のギリ

シアの数学者エウクレイデスによる平面幾何学の書籍を漢訳したものであり、後者は測量技術に関する書籍である。また、彼は初の漢字表記の世界地図である「F」を刊行した。こうした活動は、中国の高官との交流を通じて、ヨーロッパで修得した自然科学、とりわけ数理科学の知識を伝えることが中国人の信頼を得る最も効果的な方法であるとリッチが考えていたことを示している。

その後、王朝が交代した後もイエズス会士と中国皇帝との関係は続いた。康熙帝の側近となったジョアシャン＝ブーヴェは、皇帝一族の民族言語である G 語を習得し、幾何学・解剖学・植物学などを伝授した。ジャン＝フランソワ＝ジェルビヨンは、H 朝とロシアとの国境を定めたネルチンスク条約の交渉における通訳を務めた。この際、ジェルビヨンが中国東北部の地図を康熙帝に進呈したことが契機となり、皇帝は中国全土の地図の作成を決め、ブーヴェに実測と製図を命じた。これが中国初の実測による全国地図「皇輿全覽図」である。

このようにイエズス会士たちは康熙帝との信頼関係を築いていったが、彼らの本来の目的である中国でのキリスト教の布教については順調には進まなかった。確かに、ネルチンスク条約の締結により、康熙帝は教会の建設を許可し、さらにはイエズス会を公認した。しかし、その治世の晩年に、教皇クレメンス11世が中国人信者の祖先崇拜を禁止したため、康熙帝は宣教師追放令を出して許可証のない宣教師を国外に退去させるとともに、中国人のキリスト教への入信も禁じた。

I 帝は父康熙帝の禁教政策を受け継ぎ、宮廷に仕える一部の宣教師を除いて全ての宣教師を追放し、布教を全面的に禁止した。さらに、I 帝の子である乾隆帝もまたキリスト教布教禁止令を踏襲した。とりわけ、彼は西洋との貿易港を広州に制限し、かつ、取引を特定の中国商人である J にのみ許可する政策をとったために、宣教師のみならず一般の西洋人の中国大陸入境も困難となった。その結果、イエズス会士が再び中国へ来航するようになるのは、アヘン戦争の講和条約である南京条約の締結を待たなければならなかった。

Ⅲ 次の文章を読んで空欄に最も適切な語句または数字を記入し、下線部についてあとの問いに答えよ。

紀元前7年頃（あるいは紀元前4年頃）にガリラヤ地方のナザレという村で生まれたイエスは、ガリラヤ地方の農漁村などで説教を始めた。彼の説教に魅せられた人々が弟子となり、徐々に集団を形成していった。しかし、イエスはユダヤ教パリサイ派などに対する批判もおこなっていたために逮捕され、ローマ帝国の属州ユダヤの総督であった A の命で処刑された。イエス自身はユダヤ教徒としてその生涯を過ごしたが、死後に彼が復活したこと、彼が神の子であること、そして、彼が世界の終末の際に現れて人々を救済する存在である B であることを信じた弟子（使徒）たちが集団を形成し活動が続けていく。初期の段階では、彼らは自分たちをユダヤ教徒と見なしていたが、徐々に他のユダヤ教徒との差異が目立つようになっていく。このようなイエスや使徒に始まる宗教運動がユダヤ教から分離しキリスト教へと発展していくことになる。

使徒たちの活動によってこの宗教運動に参加する人々は増え、ローマ帝国各地に信者が存在するようになった。ローマ帝国の首都であるローマ市においても、この宗教運動の信者は既に紀元後1世紀の半ばには存在していた。『新約聖書』に彼の書いた「ローマ人への手紙」などの書簡が収録されている使徒パウロは、小アジアやギリシア地域を中心に各地で布教活動を行ったことで知られている。『新約聖書』に収録されている「使徒行伝」の記述によると、パウロはエルサレムで逮捕された後、裁判を受けるためにローマ市に護送され、ローマ市で殉教したと伝えられている。使徒の筆頭とされる C もローマ市を訪れたとされており、後に彼は最初のローマ司教、すなわちローマ教皇と見なされるようになっていった。ローマ市の教会は首都の教会として、また、C とパウロという2人の偉大な使徒の伝統を受け継ぐ教会として、帝国の他の地域の教会や信者からも敬意を受けるようになっていく。そのような状況下、ローマ教皇もキリスト教徒の中での指導的な立場を徐々に明確にしていった。ローマ教皇自身も3世紀になると教会全体に対する自らの権威（いわゆる「首位権」）を主張するようになっていく。

一方、3世紀のローマ帝国は大きな危機の時代であり、D 時代と呼ばれる

ほど兵士出身の皇帝が数多く登場した。そして、この時代以降、キリスト教に対する大規模な迫害が繰り返されるようになり、258年には、当時の教皇シクストゥス2世も殉教に追い込まれている。最大の迫害は **D** 時代の混乱を収拾したディオクレティアヌス帝時代に行われたもので、時のローマ教皇マルケリヌスすらキリスト教信仰を棄てたという。しかし、**E** 年のミラノ勅令でコンスタンティヌス帝（1世）とリキニウス帝がキリスト教信仰を認めると状況は大きく変化した。コンスタンティヌス帝はローマ教会にも多大な好意を示し、ローマ市外縁部のヴァチカン地区にあった **C** の墓廟の上に大聖堂を建てるよう命じている。ローマ市内のラテラノ地区には、中世を通じてローマ教皇の拠点となり、「全教会の頭にして母」という称号で知られるようになるサン＝ジョヴァンニ＝イン＝ラテラノ大聖堂が建立された。また、コンスタンティヌス帝の母親のヘレナも、サン＝ジョヴァンニ＝イン＝ラテラノ大聖堂の近くにサンタ＝クローチェ＝イン＝ジェルザレム教会を建立している。

他方で、西ローマ帝国の滅亡後、ローマ教皇の立場は東ローマ皇帝との関係性に大きく影響されることになった。その端的な例が教皇シルヴェリウスだろう。彼は、北アフリカを支配していたヴァンダル王国や、イタリア半島などを支配していた **F** 王国を滅ぼしたことで知られるユスティニアヌス1世^[3]によって廃位されている。また、ローマ帝国の新首都となったコンスタンティノープルの総主教の権威が上昇していくと、ローマ教皇は自らの首位権について繰り返し主張しなくてはならなくなった。しかし、6世紀後半以降、コンスタンティノープルにいる皇帝がササン朝ペルシアやイスラーム勢力との戦いに忙殺された結果、西方に対するその政治的影響力が後退していくにつれ、ローマ教皇の自立性は強まっていった。教皇 **G** 世は、596年にイングランドへ使節団を派遣してキリスト教の布教をおこなうなど、独自の動きを示すようになっている。ただし、それは皇帝の政治的・軍事的保護をあまり期待できなくなったことをも意味した。例えば、**G** 世はローマ市に押し寄せたランゴバルド王国軍と自ら対峙しなけりばならなかった。さらに、ローマ市の維持・運営やローマ市及びその周辺に駐屯する軍隊の維持費もローマ教皇が負担することが多くなった。財源確保のためにこの時期にローマ教皇が進めたローマ教会の所領の再編が、後世のローマ教皇領の中核となっていく。

8世紀前半、聖像（イコン）崇敬に対して厳しい態度をとったことで知られる皇帝 **H** 世の時代以降、ローマ教皇とコンスタンティノーブルの皇帝との関係は悪化した。代わりに大きな意味を持つようになったのがフランク王国との関係である。フランク王国では、8世紀前半までに **I** 家出身の国王の権力が有名無実化しており、宮宰を務めていたカロリング家^{〔4〕}に実権を奪われていた。教皇ザカリアスは751年に、それまで宮宰だったカロリング家の **J** を国王として承認した。同じ年、コンスタンティノーブルから派遣された総督の拠点だったラヴェンナ地方をランゴバルド王国が奪った。そこで、**J** はランゴバルド王国を攻撃してラヴェンナ地方を制圧し、その地域を教皇に寄進して教皇との関係を強化した。カロリング朝の国王と教皇との関係は、**J** の子のカール大帝が教皇 **K** 世によって800年のクリスマスにローマ皇帝として戴冠されるなど、さらに強化されていくことになる。

- 〔1〕 この時期にローマ皇帝だった人物は誰か。
- 〔2〕 『新約聖書』に収録されているイエスの言行録を何というか。
- 〔3〕 ユスティニアヌス1世の皇后であり、共同統治者でもあった人物は誰か。
- 〔4〕 カール大帝の宮廷に招かれたイングランド出身の神学者は誰か。

Ⅳ 次の文章を読んで空欄に最も適切な語句または数字を記入せよ。

スペインのプラド美術館には、宮廷画家フランシスコ＝デ＝ゴヤ（1746～1828）が描いた「カルロス4世の家族」と題された絵がある（下図）。中央より少し右寄りに当のスペイン王カルロス4世が、その左には王妃マリア＝レイサが2人の子供たちを両側にして立っている。絵の左端前面に立っている王の長男フェルナンド（7世）は、彼がやがて父王に対してクーデタを画策することを予言するかのよう



カルロス4世はフランス・ブルボン家出身のアンジュー公フィリップ（フェリペ5世）の孫にあたる。スペイン・ハプスブルク家最後の王となったカルロス2世は子に恵まれず、生前にフィリップを後継者として指名していたものの、フランスの覇権拡大を嫌う近隣諸国はこれに反発し、

A

戦争に発展した。この戦争の講

和条約においてフィリップはスペイン王として認められたが、このとき **B** はイベリア半島南端のジブラルタルを獲得した。ジブラルタルが現在、 **B** 領なのはそのためである。

フェリペ5世の子であり、またカルロス4世の父でもあるカルロス3世は啓蒙専制君主として知られる。カルロス3世に影響を与えた啓蒙思想とは、教会や封建的貴族といった旧来の権威を否定し、人間の理性に則って社会の進歩を図ろうとする考えかたである。啓蒙思想は、 **C** 年に始まるフランス革命の思想的根拠ともなった。啓蒙思想家モンテスキューが『法のスリ神』で説いた **D** は、権力の分散と均衡によって権力の濫用を防ごうとする仕組みであり、アメリカ合衆国憲法やフランス人権宣言にも取り入れられた。これらに影響を与えた思想としては、イギリスの哲学者 **E** らが唱えた社会契約説、ならびに彼がその著書『統治二論』で示した抵抗権が挙げられる。

フランス革命勃発の知らせがスペインに届くと、外務大臣フロリダブロンカはフランスとの国境に軍隊を配備した。また、 **F** 審問所に君主制を批判する出版物の検閲や啓蒙思想家らの監視を強化させた。 **F** 審問とはカトリックの教理に反する思想や行為をただすことを目的に設けられた制度であったが、特にスペインでは王権の利害と結びついて機能していたのである。

啓蒙思想の影響を受けていたゴヤは、1799年、迷信を信じ込む民衆、腐敗した教会、大衆に寄生する貴族などを諷刺する内容の銅版画集『気まぐれ』を出版した。しかし、その後まもなく出版を中止してしまった。 **F** 審問所からの訴追を逃れるためであったという説もあるが、真相はわからない。ゴヤが「カルロス4世の家族」を描いたのは、それから少し経った後のことである。

フランスでは革命勃発後に第一共和政が成立、国民公会の決議によりフランス国王 **G** 世は処刑されて、1804年からはナポレオン1世による第一帝政の時代に入った。なお、第一帝政の開始までに、フランス革命の波及やフランスの勢力拡大を恐れるイギリスなどのヨーロッパ諸国は、2度にわたって **H** 同盟を結成した。しかし、いずれも、対外戦争におけるフランスの軍事的優勢により中核国が講和に転じたため瓦解した。

ナポレオンは軍事力を背景にヨーロッパ諸国の大半を支配下に置いたが、このフ

ランスの支配に反発して、自らが帰属する国家や民族を自覚しそれを重視する運動が高揚した。哲学者 **I** が「ドイツ国民に告ぐ」という連続講演を行って、ドイツ人の国民意識の形成を訴えたことは有名である。

スペインの民衆もフランスの支配に抵抗した。1805年の **J** の海戦に敗れ、イギリス本土への進出を断念させられたナポレオンは、翌年、支配下にある国々にイギリスとの通商を禁じる大陸封鎖令を出してイギリス経済に打撃を与えようとした。大陸封鎖令に従わないポルトガルへの出兵を口実にナポレオンはスペインにも侵攻、さらには自身の兄ジョゼフをスペイン王ホセ1世として即位させた。ゴヤが制作した2つの絵画「1808年5月2日、マドリード」「1808年5月3日、マドリード」には、フランス軍に抵抗して蜂起し、これに処刑されるスペイン民衆の姿が描かれている。1812年にナポレオンは、ポルトガルと同様に大陸封鎖令に違反した **K** へ遠征を行う。遠征軍はモスクワへの入城は果たすものの、補給を絶たれて撤退、その帰路には敵襲や寒気のために多くの犠牲を出し、結局、この遠征は失敗に終わった。

フランス革命の影響は中南米にも波及し、スペインを含むヨーロッパ諸国の植民地では独立運動が勃発した。最初に植民地支配を脱したのは、フランスの植民地であった **L** である。これにより、世界最初の黒人国家である **L** 共和国が成立した。その後、大コロンビアを建設し初代大統領となった **M** やアルゼンチン独立運動などで活躍したサン＝マルティンといった指導者のもと、1820年代までに中南米のほとんどの国がスペインやポルトガルによる支配からの独立を成し遂げた。現在、**M** の出身地であるベネズエラのカラカスでは、当地の空港に彼の名が付けられている。この後、スペインは、1898年のアメリカ＝スペイン戦争における敗北により、**N**（現在はアメリカ合衆国の自治領）などを手放すことを余儀なくされ、中南米に領有していたすべての植民地を失うこととなった。

ナポレオンの失脚後、ウィーンで国際会議が開かれ、フランス革命前の体制を是とする **O** 主義の考えのもと各国の王政を復古させることが提唱された。スペインでは、国王に返り咲いていたフェルナンド7世が絶対王政を復活させた。啓蒙思想の影響を受けていたゴヤはそれに失望したのであろうか、1824年、病氣療養を理由としてフランスに亡命し、その地で生涯を終えた。

「カルロス4世の家族」の薄暗い左隅にはこれを描いたゴヤ本人の姿が見える。キャンバスを前にした画家の目はこちら側に向けられている。動乱の時代を目撃し、当時の人々のさまを時に揶揄しながら冷静に描いたその目で、この絵と対峙する私たち、そして私たちが生きるこの時代を見つめているのかもしれない。